
息継ぎをしない猫

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

息継ぎをしない猫

【Zコード】

N17880

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

兄が水泳部の強化合宿で、県の運営する大きな屋外プールに練習に行っていた時、父と私が同行した。父は兄ばかりを構つていて、私の事など全く気にしていない。突然降りだした雨の中で、私は奇妙な体験をする。

雨が降つたのが日曜日の午後だつたのか、月曜日の午前中だつたのか、今はもう思い出せない。それは、兄が水泳部の強化合宿で、県の運営する大きな屋外プールに練習に行つていた時の事だつた。その頃、小学生だつた私にとって、そのプールは大きすぎたし、暗くて深かつた。飲み込まれたらどうしようという恐怖感から、私はプールサイドの一番端つこのフェンスに持たれかかつて眺めていた。兄は、競技用に仕切られているプールを使つていた。

父は熱心な指導者で、とりわけ兄に厳しかつた。何故、あんなにも父が兄に対して熱心になれるのか、そして何故、私に対する無関心でいられるのかが、私には分からなかつた。

その日も、練習を見るために連れてきてもらつたものの、父の関心は兄の練習に対してだけだつた。遠くの方で父が野次を飛ばすのを、ぼんやりと聞いていた。そして、突然空は晴れているのというのに、激しい雨が降り出したのだつた。

泳いでいた人達は、すぐに止むだらうと思ひながらも、ほとんどの人人が屋内に避難した。

しかし、父と兄はそれでも、練習を止めようとしなかつた。

私も、兄が練習していたのでそのままの体勢で座つて見ていた。激しくプールサイドに水が叩きつけられて、視界も濁んだ。ようやく雨が弱まつて、私がプールの方を見てみると、少し小太りな猫が一匹、目の前をのんびりと歩いていくのが見えた。

私は思わず

「ねこ！」

と叫んだが、雨と父の怒鳴り声で搔き消された。そのまま猫は、兄の泳ぐ競技用のプールの反対にあつた、潜水用のプールに向つた。

私は、誤つて猫が落ちないかと心配になつて、猫を追いかけたが、

猫はそのままプールの中に潜ってしまった。10秒経つても、30秒経つても、猫が浮いてくる様子はなかつた。目を凝らしてプールを覗くと、猫らしき黒い陰が5メートル位、先にあるのが見えた。私は、もつとよく見ようと体を前に出したせいで、そのまま水の中に落ちてしまった。

水の中で、猫は必死になつて前に進んだが、私は息も続かないばかりか、パニックになつて溺れてしまった。それからすぐに、私は助けられ、医務室のような所に寝かされていた。目が覚めると、いつも兄を怒っている父が、逆に兄に怒られているという奇妙な光景が見えた。

私が目を覚ました事に気付いた父は、無愛想ながらも私を怒らなかつた。私は、また無視されたと思ったが、次に父は「まずは、息継ぎから教えるか」と呟いた。そして、いつものように無愛想に大きな手で私を撫でた。あの猫は息継ぎなしで、どこまで泳いだのだろう。私は、あの猫の事を思い出す度に、何故か父の大きな手の事を思い出している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1788c/>

息継ぎをしない猫

2010年12月7日15時08分発行